上智大学経済学部　同窓会会報　エコノミアン
ECONOMYAN VOL.49
◆発行日／平成27年10月15日　◆発行／経鶯会 千代田区紀尾井町7-1 上智ソフィア会内 ◆編集／広報委員会　編集長 小泉 基靖（1969経・経）
www.sophiakai.jp/blog/economyan/

～特別寄稿～

最終講義「文明史観と歴史人口学 ―21世紀文明と日本―」

上智大学名誉教授・静岡県立大学学長　鬼頭　宏

1980年に講師として着任して以来、35年間、経済学部経済学科で教育・研究に従事してきた。すばらしい先輩、同僚、学生に恵まれ、優れた環境を与えていただいた上智大学に、いまあらためて感謝している。日本経済史の専任教員として採用されたが、それに加えて私が研究テーマとして取り組んでいた歴史人口学、すなわち人口の歴史的研究を思う存分、講義に活かす機会を与えられた。

就任当時、ヨーゼフ・ピタウ学長から辞令をいただいたとき、私は江戸時代にキリスト教を取り締まる目的でつくられた宗門人別改帳を資料に、人口の研究をしていると伝えたところ、優しい笑顔で、研究のためなら自由におやりなさいと言ってくださったことを思い出す。

江戸時代の村ごとの詳細な研究は、それはそれで大事なことなのだが、一方で、全国各地域の長い期間を通じての人口変動についても知りたくて、いろいろなデータをつなぎ、また独自に人口を推計した。その成果を本にしないかというお誘いをPHP研究所からいただき、1983年に『日本二千年の人口史』を出版した。

これを当時、一般教育主事を務めていた越前喜六先生に進呈したところ、すぐその年の秋から「歴史と人口」というタイトルで講義を開くことになった。日本人口史と名を代えて、全国でも類のないこの講義を30年も続けてこられたのも上智大学の自由な風土のおかげである。

2000年には、データを更新するとともに、人口波動と文明システムの関係を明確にするように内容を書き改め、『人口から読む日本の歴史』として講談社（学術文庫）から出版した。日本列島の人口が、縄文時代から現在まで、四回の大きな増加とそれに続く減退を交互に繰り返してきたことは83年にもわかっていたが、当時はそれを積極的に文明システムと関連づけてはっきりと書く自信がなかった。改訂版ではそれを強調したのである。

国際日本文化研究センターを中心とする二つのビッグ・プロジェクト、「地球環境の変動と文明の盛衰－新たな文明のパラダイムを求めて」（代表 梅原猛）と「ユーラシア社会の人口･家族構造比較史研究」（代表 速水融）に参加することによって、人口変動、文明転換に加えて、環境変動を含めたより複雑なシステム転換を考えるようになった。その成果は、2002年に『環境先進国　江戸』（PHP研究所、のちに吉川弘文館）と『文明としての江戸システム』（講談社）として発表した。

一連の研究から導きだしたことは、人口減退期はいずれも、それまでの人口と経済の成長を支えてきた文明システムが、資源や環境の制約から成長を持続できなくなった局面、すなわち成熟社会であるということである。成熟社会は新たな文化的な伝統が形作られた時代でもある。平安時代の国風文化、江戸時代後半の伝統文化の成立はその好例である。しかし同時に、人口減退の成熟局面は、平安から鎌倉時代にかけての武家政権の成立と定期市の簇生、江戸後半における農村工業化のように、次世代の文明の芽が胚胎された時代でもあった。

このような視点で、人口減少が進む21世紀の文明をどのようにデザインすべきなのか。第一に、人口が減少する21世紀は産業文明の成熟期であって、経済の量的拡大が困難な時代である。それゆえ、目指すべきは静止人口の実現とGDPにかわる新しい豊かさの追求である。そして第二に、長寿に適合したライフサイクルの確立、人口縮小社会への適応、そして自立、共生、循環による持続可能な地域の形成である。

歴史を振り返ることは未来を照射することだ。よりよい未来をつくるためにぜひ過去の歴史に学んでいただきたい。

総会でお会いしましょう

経済学部同窓会（経鷲会）会長　上原 隆一（1976年経・営卒）

秋本番となりました。経鷲会会員の皆様にはご清栄にてお過ごしのことと存じます。平素は多大なるご支援ご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。殊には本年も皆様からのご厚志50万円を経済学部へ経鷲会研究奨励金として寄付することができました。重ねてお礼申し上げます。経鷲会Webサイトに学院からの礼状を掲載させていただいております。

経鷲会ではその理念である卒業生の相互交流と学部への貢献を実現するべく様々な事業を実施しております。6月には角井副会長が10号館講堂で学生対象に講演会を開催して大好評を博し、学部からこの秋にも2回目を実施して欲しい旨要請されております。また毎年恒例となった学部の役職教授をお招きした懇親食事会は大きな盛り上がりを見せました。

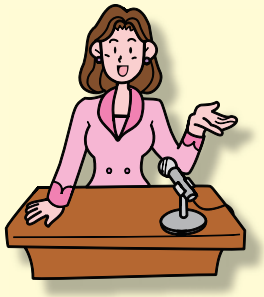
卒業生の相互交流としては、ASFワインセミナーで産出量世界一となったスペインワインを特集、更に9月にはワイナリーツアーを実施いたしました（ソフィア経済人倶楽部と共催）。久しぶりの青空の下、訪れた笛吹市のルミエールワイナリー（国指定有形文化財の石造り醸造槽、半地下熟成庫を完備）では社長直々のお出迎え、極力農薬を控え自然の力を引き出す農法で下草も刈らない圃場を歩き、醸造・貯蔵設備の案内、テイスティングセミナーでは本邦初の国産テンプラニーリョを含む5種のワインの解説を含み、最後はお見送りまで全て社長のアテンドで恐縮しながらも充実した一日を過ごしました。会員各位におかれましてはこれら催しにも是非ご参加いただければ幸いです。

本年は事情により11月開催となった経鷲会総会ですが、山田学部長の講話と福田順子氏による講演会が予定されています。皆様11月にお会いしましょう。

樹齢30年を超える古木
（若い木に比べ、古木に実るぶどうはクォリティーが高いといわれる）

経鷲会＝これからの予定

経鷲会では様々な講演会、懇親会などを開催しております。本年中の予定をご紹介します。ご興味のある方は、経鷲会副会長　田村　隆　tamura@sophia.jp　までご連絡ください。



①2015年11月7日 経鷲会総会（12号館　201教室）

13：00　総会・代議員会
13：30　福田順子氏講演
14：30　山田経済学部長講話
15：15　懇親会【会場：プラザエフ（主婦会館）】

②2015年11月26日 佐々木芳邦氏講演会　（限定30名）

演題：「日本と中国の違い」
場所：日本橋YUITO地下1階　「タバーン」　18：30～20：00
会費：4000円

佐々木氏は、母が日本人、父が台湾人で、3歳の時に大陸に渡り、文化大革命の荒波をくぐった経験をお持ちです（本誌6頁参照）。現在ホテルオークラに勤務。今回は大好評の前回に続き、2回目の講演です。

会費には飲み物、食事代が含まれています。

縄文の華・火焔土器の謎

古屋　毅（1957年経・商卒）

私は、昭和32年にシェル石油（現在の昭和シェル）に入社し、40年間勤務して、平成9年末に出向先の新潟県糸魚川での4年間を最後に定年退職しました。今から30年前になりますが、青森県弘前市に出向勤務していた頃、ふとしたきっかけから日本の古代史に興味を抱くようになり、その後エスカレートして趣味の範囲を超え、研究者の域に入ってしまいました。

日本列島には、BC1万4千年頃から世界史でも希な土器文化をもつ縄文時代が1万年以上もつづきました。始めは水や食料の貯蔵や煮炊きに使う深鉢型の土器が主流でしたが、次第に生死に対する世界観や精神性を表現する紋様や造形の土器もつくられ、芸術性豊かな土器・土偶が出現してゆきました。今回のテーマである火焔土器も、縄文中期（BC 3千年前後）の土器文化が花開いた頃に作られ、新潟県信濃川中上流域に集中して出土する地域性の濃い土器で、2～3百年で忽然と姿を消してしまったという不思議な土器なのです。

最初にこの土器が発見されたのは昭和11年12月、地元郷土史家・近藤篤三郎氏が長岡市郊外の馬高遺跡を発掘調査中偶然発見し、修復してみると炎が燃え盛るような造型をしていたことから火焔土器と呼ばれるようになりました。その後、長岡から十日町・津南にかけての信濃川中上流地域で次々と同じような形状をした土器が発掘され、これらを火焔型土器と称することになりました。

昭和27年、かの岡本画伯がフランス留学から戻り、上野の国立博物館でこの火焔土器を見た時、「こんな躍動美に溢れる美しい土器が日本にあったのか」と感動し、自身「縄文芸術論」を著したという有名な話があります。それから火焔土器が縄文土器の粋を極める代表的な土器として脚光を浴びることになり、平成11年には、十日町博物館所属の笹山遺跡発掘の火焔型土器も含む土器群が国宝に指定されました。

私と火焔土器との出会いは、平成10年3月地域交流団体に参加して津南町を訪れた時、町長さんから「皆さん、思い切りいじり回してください」といって津南町出土の火焔型土器のレプリカを手渡されたときです。「あつ、これは効率のいい石油の燃焼器だな」との直感がひらめき、次に「新潟は石油が採れる」という思いがよぎり、石油人であったためか興味をそそられたのが、火焔土器を追跡する発端になったのです。

十日町や長岡の博物館通いがはじまり、大中小さまざまな火焔型土器を観察しているうちに、ほとんどの土器の内側にうっすらとススが付着していることに気付きました。灯油など燃した時に出るキメの細かいカーボンで、石油を燃したのだという感触をつかみました。

そのあと訪れた出雲崎の石油記念館で驚きの発見があったのです。それは、何と火焔型土器の出土分布と、帝石や石油資源開発が操業している石油ガス田の分布がぴたりと一致していたのです。しかも、第1号火焔土器が発見された馬高遺跡（関原町）の真下で現に帝石が関原ガス田を操業しているではないですか。

石油ガス田で生産されるガス（メタン・エタン・プロパン・ブタン）と同時に、常温・常圧で液体としてのコンデンセート（ナフサ・灯油・軽油分）が必ず付随して採れるのです。

縄文時代にこのコンデンセートが低地に溜まっているのを、縄文人が燃える水として発見したのです。これを燃したに違いないというところまでは想像できたのですが、なかなか造型と用途までは結びつかず、追跡も頓挫して数年経ってしまいました。

ところが3年前に、ふとしたことから一挙に謎が解けたのです。私が居た糸魚川には縄文中期のヒスイ工房跡がある長者が原遺跡があります。そこで火焔型土器が1基発掘されています。地元では、ヒスイとの交換でプレゼントされたものだろうと言われており、私もそんなものかと思っていました。でもよく考えてみると、いくら形が美しいからといって果たしてプレゼントされるものだろうか、と疑問に思った瞬間、「そうだ。燃える水がこれに容れられてプレゼントされたのだ。」ということに気がついたのです。

結論を言いますと、あの造型は「この器の中の水は口に入れてはいけません。火が付くと危険です。」という、警告と識別のメッセージだったのです。用途は「死者を弔うためにあの容器で燃える水を燃やし、黒い煙が空高く黄泉の国までとどき、死者の再生を願う貴重な水を運搬し、

貯蔵する容器」だったのではないか。そして、死者を葬ったあと砕いて一緒にお墓に埋めたのではないかと想像できます。また、２～３百年で忽然と姿を消したことは、あの地域のガス田が枯渇してしまい、火焔土器の必要性が失せてしまったのだと考えられます。

江戸時代後期に、鈴木牧之（すずきぼくし）という人が魚沼地方の風物を書いた「北越雪譜」という随筆の中に、「雪中に燃える水の池があった」という一節がありますが、これもあの地域に地上にコンデンセートの溜まりがあったということを物語る貴重な資料だと思っています。（平成 27 年 9 月記）

経済学部特別講座
「なぜ 93 円のお茶がコンビニで買えるのか？ ～物流の重要性～」

角井亮一（1991年経・経卒、当会副会長）

この 6 月 18 日、10 号館講堂にて 350 人ほどの現役学生を前に表題のようなタイトルで講演させて頂きました。このテーマは、物流が裏方で活躍していることを伝えられる例として選びました。今、セブン・イレブンに行くと、コカ・コーラとセブン＆アイの２つのロゴがついたプライベートブランドの緑茶が置かれています（写真）。名前は「一」と書いて、「はじめ」と呼び、セブンプレミアムの商品の１つです。コカ･コーラ社が PB を作ることは抵抗があるようで、「コカ・コーラ社との共同企画」ということになっています。

このお茶の葉は、場所によって変えています。北海道、東北、関東、中部、北陸エリアは「静岡茶」、関西、中国、四国地方は「宇治茶」、九州は「八女茶」を使っています。ちなみに、山口県は、物流効率を考え、八女茶です。このように、近くで作ることによって、物流費を抑えて、低価格での販売を可能にしています。

セブン・イレブンは、ドミナント方式での出店にこだわっています。エリア集中で出店するため、トラックによる配送効率やスーパーバイザーの訪問効率も高く維持ができます。一台のトラックや一人のスーパーバイザーが行ける店舗数は、店舗密度が濃ければ濃いほど、多くなります。そして、ペットボトルをボトリング工場内での製造に変えることで、ペットボトル工場からの物流を無くしたり、キャップの共通化を行ったりすることで、製造原価を下げることができたのです。

というような話の後、質問に 30 分ほど時間を取りました。また、当日の資料は、予想を超える 150 人以上のダウンロード希望があり、学生にとって興味ある有意義な機会になったと思います。経鷲会にとっても、学生への良いアピールになったと思います。先生方より、次も期待していると言われたと聞いていますので、経済学部に対しても経鷲会の存在意義を高められたと思っています。私にとっては、多くの学生に物流の重要性を知ってもらえる機会を頂きましたので、とても感謝しております。

追記：10 月 19 日に「日経文庫　オムニチャネル戦略」が発売されます。過去最高の発行部数５万部に届きそうで、今から楽しみにしています。

－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費 3,000 円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

卒業以来、母校に行くきっかけを無くしている卒業生の皆さんへ

小川利明（1972年経・経卒、体育会OB会会長、ソフィアンズカップゴルフ大会実行委員長）

上智大学体育会OB会総会が4月25日（土）に開催され、私は新OB会長として緊張した面持ちで開会の挨拶を述べました。理事長、学長はじめ大学の関係者、各部体育会OB会会長や先輩諸兄ら約150名の出席者が集まり、体育会OB会の活動方針や現役体育会の顕著な成績を収めた団体、個人の表彰が行われ、最後に現役学生も参加して6月に開催される上南戦の必勝激励会が催されました。

その会場で、柔道部OBの小泉先輩がニコニコした顔で近寄り、「経済学部の出身だよね」と声をかけて下さり、それがこの原稿執筆のきっかけでした。

私は卒業後に松下電器産業㈱に入社、営業職として地方勤務が続きました。そして1996年に東京に戻ってきました。卒業して24年が経っており、母校へ行くきっかけを全く逸していました。

学生時代、ハンドボール部に所属していたのでOB会からの連絡は毎年届いていました。11月にOB会総会が実施されていましたが、卒業以来一回も顔をだしていませんでした。

東京へ転勤後、2～3年が経った頃、せっかく東京にいるのだからOB会総会に行ってみようと思い、四ツ谷に出かけました。一抹の不安を胸に体育館の2階の鉄扉を開けると、ハンドボールのゴールがあり、その横を通って体育館に上がりました。現役学生はもちろん後輩OBの顔も全く分かりません。その時、永井先輩（1965法法）が「おお！小川じゃないか。よく来たな！」と声をあげて歓待してくれました。横には1年後輩の阿見利治氏(理数)が笑って立っていました。24年の時間を一気に縮めてくれた瞬間でした。

それをきっかけに、ハンドボールOB会、体育会OB会に参加するようになりました。

2001年、当時の槇原OB会長（1970経経）のもとで財務を担当したのが体育会OB会との付き合いの始まりでした。その後原田OB会長（1967経経）の後を引き継ぎ、2015年度から新任会長になりました。私で体育会OB会長は4代目ですが、全員経済学部卒業なのも何かの縁かもしれません。

卒業して、時間が経つと大学との縁が薄くなり、なかなか四ツ谷へ行くきっかけがつかみにくく、足が遠のいている方が多くいるのではないでしょうか。

でも思い切って四ツ谷へ足を運んでみてください。5月のエコノミアンゴルフ大会､5月末のオールソフィアンの集い、6月初旬の上南戦、9月のソフィアンズカップゴルフ大会、11月のソフィア祭、12月初旬の皇居一周健康マラソン大会等、色々な催しが行われています。ソフィア会事務局は3号館1階にありますので顔を出してみてください。

足を運んでいただければ、懐かしい景色のなかで思いがけず友人に再開する事でしょう。顔を見合わせた瞬間に、学生時代にタイムスリップすると思います。是非、四ツ谷へお出かけください。

2015年上智大学公開講座 秋期 ソフィア経済人倶楽部協賛「新・グローバルリーダーシップ入門」―9月30日（水）開講

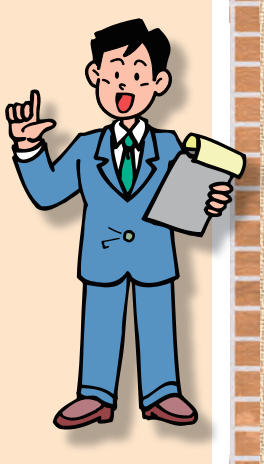
清水　進　（1971年経・営卒、ソフィア経済人倶楽部・産学共同事業委員会委員長）

ソフィア・コミュニティ・カレッジ､「グローバルリーダーシップ入門」は、2011年4月ソフィア経済人倶楽部の企画で始まりました。コーディネータ・講師の菊井高昭経済学部教授のご尽力とソフィア経済人倶楽部のメンバーをはじめ多くの方々のご協力を得て、本講座が実施され、2013年秋期で6回、受講修了者は100名を超えました。2014年秋期講座では、荒木勉経済学部教授にコーディネータ・講師をお引き受けいただき､「新・グローバルリーダーシップ入門」として再開、講座の継続的発展を期すことになりました。

本講座は､「変革期のリーダー」に求められる課題を、様々な分野で活躍する講師とともに検証する講座です。既に通算8回を数え、延150名を超える受講修了者の皆

様から、定評をいただいております。9回目の開催を通じて、皆様の支持と期待に応え、更なる発展を目指す所存です。

講座の概要（講師、講義日程、テーマ等）は下記の通りです。



講 座 名：　講座番号 2140　新・グローバルリーダーシップ入門
講義期間：　2015 年 9 月 30 日～ 12 月 16 日（12 回）
曜日時間：　毎週 水曜日　18：45 ～ 20：15
受 講 料：　32,400 円
定　　員：　40 名
コーデイネーター：　荒木　勉 上智大学経済学部 教授
講師（敬称略）：
小林　順治　上智大学経済学部 教授
田所　邦雄　英国国立ウェールズ大学 MBA 日本語プログラム 教授
　　株式会社エアーウィーヴ 取締役 ／ TCC コーポレーション（株）代表取締役社長
高橋　　透　株式会社ニューチャーネットワークス 代表取締役
馬越恵美子　桜美林大学　経済経営学系 教授 ／ 異文化経営学会会長 ／（株）日立物流 取締役
三城　雄児　BBT 大学　経営学部グローバル経営学科 准教授 ／ 株式会社 JIN-G 代表取締役
田澤　由利　株式会社テレワークマネジメント 代表取締役 ／ 総務省地域情報化アドバイザー
豊田　圭一　株式会社スパイスアップ・ジャパン 代表取締役

私の中国

佐々木芳邦（1985年 経・営卒留学生）

太平洋戦争時代、台湾人の父は兵役を逃れるため日本に来て、昼働いて夜日本大学に通っていた。何度も死にそうになったそうだ。

台湾との間に行き来する客船。反対方向から来る客船と擦れ違ったとき、お互いに手を振った。まさか！向こうの客船は突然米軍の魚雷に撃沈され、生き残ったほうは度胆を抜かれ、皆呆然となった。

過労で重症の肝炎になり、一人で床に倒れたまま、飲まず食わず天井を仰いで死を待ったこともある。ところが一週間経ったら、若いエネルギーが少し残っていたのか、蘇ったのだった。そこですぐ薬と食べ物を見つけることにした。

東京大空襲。周りは火の海。ただ必死に走りに走った。鉄道を超えてやっと命拾いした。気づいてみたら自分は風上に向かっていた。風下だったらおしまいだったに違いない。

こうして、私の誕生が可能になった。いや、正確にいうと、今 1 人の人間がいるということは、その人の直系の先祖代々の中に、子造りの使命を果たす前に亡くなった人は 1 人もいなかった証拠だ。

私だって命は危なかった。

父の日本における最後の仕事は、銀座 8 丁目にある東京華僑総会「国際新聞」の新聞記者だった。そして机の向かい側の佐々木ユキという名の秋田出身美女と社内結婚した。大勢いた親戚の中で、母親の 1 人の姉婿以外、全員中国人との結婚に反対したという。そして、1950 年 2 月東京豊島区の長崎に尤芳邦という名前と共に私が誕生した。

応援する親戚の存在もなく、母との結婚が成立せず、父が他の女性と結婚していたとしたら、そこで生まれてくる子供は私ではなく、幻となった私の、兄弟だっただろう。

2 歳ぐらいのときか、ある日、2 階の窓から外を覗き、下に落ちてしまったことがある。排水溝の縁に顎が当たり、死なずに済んだが、今でも傷跡が残っている。

3 歳足らずのとき。母は生まれたばかりの弟の世話にあけくれていた。ふと思い出したのか、私のほうに視線を向けてみたらビックリ仰天！私の顔は土色だった！直ぐお医者さんへ行ったら、お腹は回虫で一杯だったのだ。薬を飲んでどっと排出した後、母が箸で 1 本ずつ数えると、何と全部で 36 本もあったという。もっと処置が遅れていたら助からなかったと言われたそうだ。

父は発起人の１人として、日本華僑帰国運動を行った。1953 年大きな船に乗って神戸港から天津に着いた。3 歳の私が船の甲板に立って母親に支えられ海に向かっておしっこしたときの気持ち良さは、今でもはっきり覚えている。タイタニックの主人公が船の先頭に立たされ貧乏男に口説かれた理由も分かるような気がする。

中学校 3 年生のときだった。1966 年 6 月 1 日、中国共産党機関紙「人民日報」が凄い社説を出した。「魑魅魍魎を一掃せよ！」だ。毛沢東の、劉少奇国家主席からの政権奪回のための大衆運動が始まった。毛沢東のファンであった私は何人かのクラスメートと相談して、この社説に倣って壁新聞を書いた。タイトルも「天津市党委員会を清掃し、魑魅魍魎をやっつけよう！」であった。ただ党委員会の中にも良い人がいると考え、「一掃」という言葉だけ避けた。

ところが、市政府からワーキングチームが派遣されてきて、全学校の生徒が動員されて壁新聞で私を批判した。教室の外側に 1 m^2 弱もの字の大きさでスローガンが張られた。「反革命尤芳邦を打倒せよ！」とあった。16 歳の私は政治の怖さを全く理解せず、これや面白い！と思い、記念にみんなの書いた壁新聞のタイトルと作者の名前をノートに記した。すると、また新しい壁新聞が張り出された。「尤芳邦は報復するつもりでいるのだ！」とあった。私はすぐ、みんなの考え方のほうが自然なのだと気が付いた。

文革の初期は秩序が保たれていた。その次に来る最盛期のような混乱状態であったら、私は袋叩きにされ死んでいたかもしれない。

西澤ゼミ　新日本監査法人オフィスツアー報告

伊藤美沙子（2011年経・経卒）

2015 年 6 月 10 日、私が勤務している新日本監査法人（EY）では、経済学部の西澤茂教授のゼミナールに所属する現役上智大学生 38 名を迎え、オフィスツアーを行いました。昨年に引き続き 2 回目の開催となりました。

経鷲会監事の松本正一郎シニアパートナーのウェルカムスピーチにはじまり、獣医学部に進学したという珍しい経歴を持つ吉田シニアマネージャーからの監査法人の業務内容に関する講演がありました。どちらも、監査法人における業務は、会計監査だけでなく、アドバイザリー業務や会計に関する本の執筆活動、会計士協会の業務など、大変多様性に富んでいること、チャレンジすれば会計士の資格を活かした無限の可能性があるということについてユーモアを交えて紹介されました。

つづいて、学生の皆さんと一緒に、私達が普段業務を行っているオフィスフロアへ移動して、ツアーコンダクター気取りの私の案内でオフィスを見学しました。会計士が実際に働いている姿を前にした学生たちは、はじめ少し緊張した様子でしたが、オフィスの地下 1 階にあるフットサルコートがドラマ「リーガルハイ」の撮影で使用されたことをお話すると、一気に笑顔になりリラックスした雰囲気になったことが印象的でした。

その後は、学生と私たちソフィアンとの懇談会となりました。私が西澤ゼミの OG であることがわかると、学生たちは興奮した様子で、西澤先生のこと、ゼミのこと、四谷キャンパスの学食がリニューアルされ豪華になったことなど、たくさん話してくれました。また、大学 3、4 年生である彼らは将来のことを真剣に考えていて、会計士の仕事は忙しいのか？　やりがいを感じることは？など、積極的に質問が飛び交いました。

今回オフィスツアーに参加した上智大学生の多くは会計士試験を目指していませんでしたが、中には「今回のオフィスツアーに参加して、公認会計士を目指す決心がついた。」、「昨年開催したオフィスツアーがきっかけで会計士の勉強を始めた。」という声もあり、大変嬉しく思いました。他にも「社会人になることに対して漠然とした不安を抱いていたが、社会人も魅力的だと思えた。」という学生の声を聴くことができて、今回のオフィスツアーが成功に終わったことを実感致しました。

EY では現在、会計士やその他職員も含めて多くのソフィアンが活躍しておりますが、他の私立大学と比較してもまだまだ会計士を目指す学生の数は少ないように思います。グローバルな視点を持ち、勤勉な上智大学生にとって、公認会計士は彼らの能力を大いに活かすことのできる職業であると言えます。今後もこのような機会を通じて公認会計士の魅力を学生たちに伝えるとともに、上智大学と EY の絆が益々深まることを願っております。

最後にこの場をお借りして、昨年度から引き続き今回のオフィスツアーを実現してくださった西澤先生に深く感謝申し上げます。

公認会計士試験について

岸もと子（2014年経・経卒）

始めまして、岸もと子と申します。現在は公認会計士試験合格者として都内の監査法人で働いております。また、ソフィア経済人倶楽部の決算作業をお手伝いしております。

公認会計士という資格は比較的知名度が低いせいか、「会計士ってそもそも何をしているの」、「税理士と何が違うの」と聞かれることが多いです。公認会計士とは会計のプロフェッショナルとして主に企業が作成した財務諸表の監査を行っております。財務諸表の適切性を保証することにより株主や債権者などの財務諸表利用者が適切に意思決定できるようにすることにより、ひいては国民経済の健全な発展に寄与することを使命としています。昨年、公認会計士試験論文式に合格した身として、公認会計士試験について僭越ながら書かせていただきます。

公認会計士になるまでには、基本的に３つの試験を受けることとなっており短答式試験（マークシート方式）論文式試験（記述式）、修了考査があります。一般的には短答式、論文式のことを公認会計士試験といい、当該２つの試験に合格すると「公認会計士試験合格者」という扱いになります。短答式試験は毎年２回５月と12月に行われ科目は財務会計論・管理会計論・企業法・監査論の４科目です。論文式試験は毎年８月に行われ科目は会計学（財務会計論・管理会計論）、企業法、監査論、租税法、選択科目（経営学、統計学、民法、経済学から１科目）の合計５科目です。修了考査は毎年12月に行われ会計、監査、税、経営に関する理論及び実務、公認会計士の業務に関する法規及び職場倫理の５科目です。公認会計士登録までの流れとしては、短答式・論文式まで合格すると、合格者の多数が監査法人で働き始めます。その他、上場企業やコンサルティング会社で働く方もいます。所定の実務経験を積みながら、日本公認会計士協会主催の実務補習所で監査、会計、税務などを３年間学びます。実務補習所は、座学やディスカッション、泊まり込みの宿泊研修や考査があり、とても充実した内容となっています。実務経験２年、補習所３年で所定の単位を取得した結果、修了考査と呼ばれる公認会計士の最終試験を受験し、合格すると晴れて「公認会計士試験合格者」から正式に「公認会計士」の登録ができることとなります。公認会計士試験の受験勉強を始めてから平均して約６年で会計士になると言われています。

近年、試験合格者数の減少が会計士業界でちょっとした話題となっています。2010年試験の短答式試験受験者数が25,648人、論文合格者数2,041人、直近の2014年は短答式の願書提出者数が10,870人、論文合格者数1,102人でした。また、合格者の職業別合格者調によれば、学生の合格者数割合が最も高く全体の42.7％を占めています（公認会計士・監査審査会HPより引用）。合格者数の減少は監査法人への就職難や景気悪化による希望退職のニュースなどによるものとされていますが、景気の改善等によって、監査法人の就職難も改善されており昨年は売り手市場でした。監査法人で人手不足を実感している身としても、受験者数が増加してくれることを願っております。

経鷲会だより

○エコノミアン　ゴルフ・コンペ

経鷲会恒例のゴルフコンペを３月21日に千葉県柏市の藤ヶ谷カントリークラブにて開催いたしました。

お忙しい中、西澤先生には経済学部を代表して初めてご参加頂き、大学の話もお聞きすることが出来ました。また、野球部OBの福田和夫さん、鈴木正さんにも参加頂きました。

昨年は、本多さんに「田村、今度ゴルフ教えてやるから」と暖かいお言葉を頂きましたので、今回は必死で回らせていただき優勝させていただきました。

来年も３月21日に開催予定しておりますので、奮ってご参加ください。

田村　隆（経鷲会副会長）